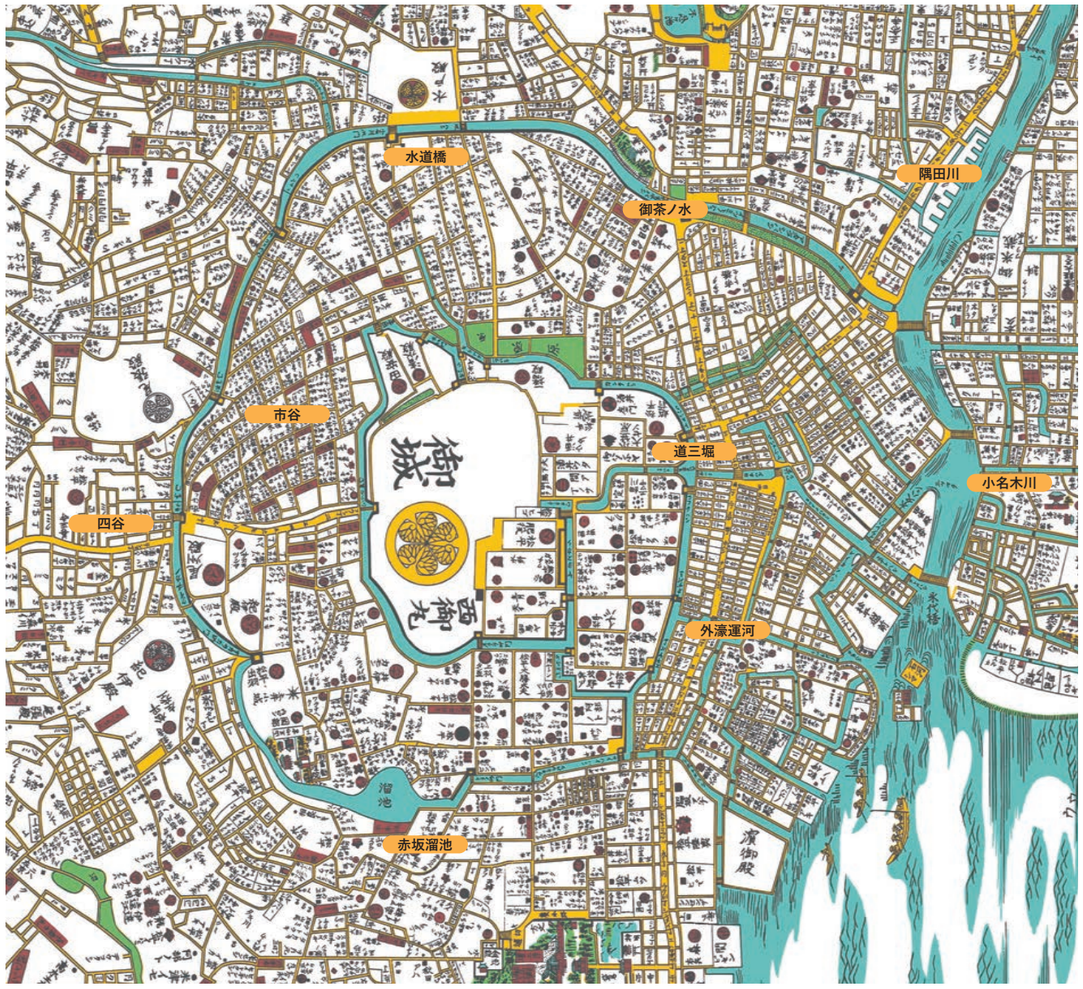
02 水運と河岸地

徳川家康が江戸に入府した際、物資を江戸城下まで運搬するため、江戸の東側に水路建設を計画しました。道三堀と小名木川が開削され、房総の行徳から主に生活必需品である塩が運ばれました。

また、日比谷入江が埋め立てられた際に、江戸前島に運河が開かれました(『外濠運河』)。同時に、江戸市街地の南方に上水源として赤坂溜池も成立しました。その後、江戸城の外郭工事が行われ、江戸城を中心とする水運網が形成されていきました。

江戸には漁業と塩以外に主要な生産物はなかったため、食材や木材などの生活必需品は全国各地から江戸へと運搬され、舟運を利用して江戸各地に運ばれました。運河沿いには、河岸地と呼ばれる空地が設置され、運搬された物資を積み下ろすための物揚場や蔵、商取引のための市が設けられるなど、人々でにぎわっていました。



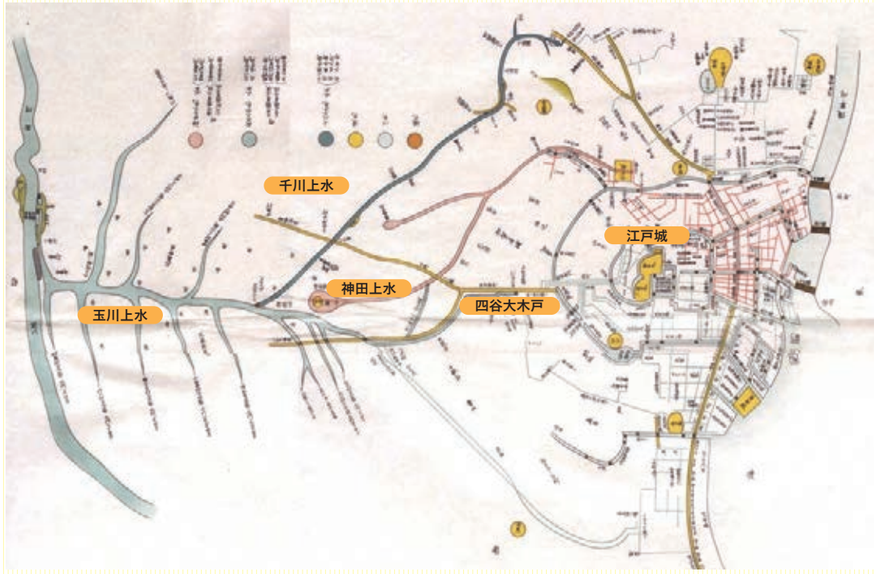
懐宝御江戸大絵図　天保14(1843)年
寛永13―16(1636―39)年頃にかけて外郭工事が行われ、外濠運河から赤坂溜池を通り、四谷、市谷、水道橋、御茶ノ水へと至る、「の」の字状の運河が構築されました。こうした水運網は、江戸各地に物資を運搬するために活用されました。
協力:こちずライブラリ「人文社復刻版懐宝御江戸大絵図」に加筆。

永代橋の広小路と河岸地　「東都名所 永代橋全図」国立国会図書館蔵
永代橋(図中左の橋)のたもとの「永代橋西広小路」は、多くの人でにぎわいました。また、豊海橋(とよみばし:図中右の橋)が架かる堀川の河岸地には多くの蔵が立ち並びました。

江戸の上水道

●江戸時代の初期には、千鳥ヶ淵、牛ヶ渕、溜池等の台地内の零細河川をせき止めて作った水源地や、低地における真水の井戸などがありました。その後、江戸の市街地の発展に伴い、上水道の整備が計画され、神田上水と玉川上水が造られました。神田上水は、寛永年間(1624―43年)に、関口・小日向台地から現在の後楽園付近を経て駿河台・小川町付近、さらには大手町付近まで給水しました。

●承応2(1653)年には、多摩川と江戸をつなぐ玉川上水が計画されました。これにより、羽村―内藤新宿間の約43kmの水路が設けられました。この水路建設に伴い、江戸の西側の郊外では、宅地化や農地化が進みました。



江戸時代の水道
出典:国立国会図書館蔵『東京市史稿 上水篇 第一』所収図に加筆。